

ぱれっとスタッフによる 福祉用語解説

『オープンダイアログ』とは、開かれた対話とも言い、精神科医療の包括的なアプローチ方法です。フィンランドのケロプダス病院で開発された、統合失調症や精神的危機に対する先進的な方法で、患者、家族、医療・支援者が、対等な立場で「対話」を重ね、薬物療法を減らして回復を促すという手法です。2021年5月には、WHO(世界保健機関)の地域精神保健サービスに関する「グッドプラクティス」の1つとして紹介され、国際的にも注目が集まっています。

●目的

回復の促進、薬物療法や入院の削減。

●特徴

議論や治療・説明ではなく、共感的な対話を通じて本人の主観的な体験を尊重する。患者との上下関係を無くして全員が対等に話をする。本人の目の前で意見交換を行ない、多様な視点を提供する。

●7つの原則

①即時対応

【24時間以内、まず今すぐつながる】

まず会って言葉を交わすことが、安全性にもつながる。

②社会的ネットワークの視点

【本人だけでなく関係性を含める】

支援資源を増やし、孤立を減らす。

③柔軟性と機動性

【状況に合わせて柔軟に動く】

状況に合わせて、支援の形を変える。

④責任

【チームが責任を引き受ける】

たらい回しにせず、最初に受けたチームが責任を持つ。

⑤心理的連続性

【途切れない支援、継続性】

本人にとって安心の土台(安全基地)になるように。

ぱれっとの職員による「福祉用語解説」。今回は、最近福祉分野以外でも注目をされている『オープンダイアログ』について解説します。

⑥不確実性に耐える

【結論を急がず不確実性に耐える】

診断や結論を急がず分からなさを抱えたまま対話する。

⑦対話主義

【対話そのものを中心に据える】

説得ではなく、対話によって新しい意味が立ち上がる。

●誤解されやすいポイント

・7原則は“実践のガイドライン”であり、特定の疾患に対する単独の治療法の説明ではない。

・対話が合う人もいれば、急性のリスクが高い時期には医療的安全確保が優先されることもある。

・「対話+チーム支援+必要な医療」まで含めて“包括的支援”として理解すると誤解が減る。

●効果

・入院や薬物に依存せず、対話を中心に回復を支援することが出来る。

・社会的ネットワークを巻き込むことで孤立を防ぐことが出来る。

・精神病症状の改善や社会復帰の促進。

・長期的な生活の質向上。

●まとめ・もっと知るために

大切なのは対話が万能という事ではなく、安全を確保しながら、本人と周囲が言葉を取り戻す場を整えるという発想です。

実際の支援や生活に取り入れるのに役立つよう、NHK厚生文化事業団では「オープンダイアログ」について伝える教材ビデオが製作されています。対話がなぜこころのケアにつながるのか?や、実践の方法などが紹介されています。ビデオ冊子は無料で閲覧できますので、皆様も一度ご覧ください。



(おかし屋ぱれっと 山元絵里)

参考：厚生労働省ホームページ(地域生活支援事業)